

## 岡 一男著 『古典の再評価』

今 井 源 衛

近頃の大学の地獄の季節の中で、私も人なみに学問とは何だと、自らにも問いかねないではおられない日々がある。それは今さら年がいてもないというみじめさと、その裏がえしの居直りの混合したふしぎな感情なのだが、結局は、いつも、理窟も何もない。ただ、他の事よりも面白いからやるだけだ、ということに落着くことが多いようだ。

そうした心境の中で、岡一男氏の新著『古典の再評価』を拝見し、私は、久しぶりに心が安まり、また力強く励まされるのを覚えた。古典研究を通じて、悠々として文学の世界に遊ぶ大先達の姿がそこにあった。それは巨大だけれどもいかつくはなく、あたたくて、この道の楽しさを村の童べにやさしく話しかける長者の面影があった。

本書の内容は、序・総説・古代前期・古代後期・中世・結語・索引より成り、全六〇〇ページ、正に堂々たる大著である。各編は数章ないし数十章からなるが、上は古事記から下は増鏡に至る。その中心を成すのは、三七〇ページに及ぶ古代後期であり、1平安文学における風土の意味、2日本における後宮文芸、3竹取物語論、4伊勢物語論、5宇津保・落窪物語論、6賀茂保憲女

とその作品、7蜻蛉日記論、8清少納言・紫式部・和泉式部とその時代、9枕草子論、10和泉式部論、11源氏物語論、12紫式部論、13源氏以後の文芸にあらわれたる類麿の傾向とその克服、14六条院宣旨論、15歴史文学の発生と展開、16藤原氏専権時代と栄花物語、17大鏡と栄花物語、18小説史上より見たる今昔物語集の諸論が含まれている。

本書所収の諸篇は、序文によると昭和十八年に成った『古典と作家』以後二十五年間に発表された論考を主とし、それにそれ以前のものも若干収めたとの事であるが、巻末の所収論文発表要旨によると、その数七十篇、その中もっとも古いものは大正十一年の成稿である。本書は実に四十七年という長期に亘る氏の既発表論文の中、『古典と作家』・『源氏物語の基礎的研究』他の単行本に収められなかった論考を、ほぼ網羅集成されたものといえよう。

岡氏の学問は、世上しばしば実証的考証学の名を以て評されているようであり、私も岡氏の真髄は、あの有名な紫式部の伝記研究に典型的に見られる該博精緻の考証にあると考えていた。しかし今回あらためて、本書の総説の諸篇を拝見して、氏の方法が実証という文字から連想されがちな硬直した文献至上主義からは遠く、むしろ心理学・社会学・歴史学等を広範に動員する幅広い文学学の方法を意図されている事を知った。本書に「文芸科学の樹立へ——」という意欲的な副題が附く所以であらう。殊に目を惹くのは、洋の東西に通じ、古今に亘る該薄な知識とその自在な引証であり、文学に悠遊する碩学の面目を窺うに足る。大正デモクラシーの中に青年期を過された人々に共通するスケールの大きさ

であり、またこれこそ、今日にまで引きつがれてきた早稲田大学の自由な学風でもあらうかと、門外漢には羨しくも思われるのである。

氏のこうした自由な立場は、具体的な作業の中に、随所に見受けられる。たとえば「平安文学に於ける風土の意味」の章において、氏は赤人と空海の作を比較しつつ、テーヌや西田哲学を採用して、「風土は人間を制約するものではなく、却って人間の創造精神の素材となるにすぎない」云々（九六頁）を云われ、さらに、「平安京人には過去の伝統がなく、世界的な新文化を（中略）新しい民族文化を創造してゆくという気概があったから、あくまで人間主義で、自然も人間世界の一部と化し、庭園化し、あるいは人工美と比較して鑑賞された。すなわち自然美は人生の装飾・および背景としての意味で享受され、従って文芸の世界では様式化されてもちいられた」（九八頁）といわれるが、これは従来の環境論としての平安京風土論を一步抜き出る卓抜な視点であり、重要な示唆を与えるものである。氏がいわゆる戦後の「歴史社会学派」に対して冷淡であつたことは、本書の随所に窺えるし、また民俗学的方法に対しても厳しい批判の言葉が見える（一四三頁）けれども、それは、単なるボレミークの爲にするものではない事が、こうした点にも察せられる。氏は文学創造における人間の主体的契機を重視されるのであり、そこに氏の自由でのびやかな作品鑑賞の淵源があり、またしばしば心理学に執される理由もあるのである。

しかし、本書の真骨頂は、やはりその緻密な考証にあるといつ

てよいだろう。所収論文の多くはその種のものであり、たとえば竹取物語遍昭作者論、藤原為時の邸宅の考証、六条院宣旨の考証など、いずれも考証の範とすべきものであらう。いったい本書所収論文は、最初の掲載誌の性格もあつたのであらう、比較的短文であり、簡潔であるが、その端々に至るところ、さりげなく重要な見解が漏らされていて、前述の如く、内容の割にはいやが上にも口数の多い論文を見馴れた目には、まことに珍重であり、学界の弊風に無言の反省を与えるものというべきであらう。

しかしまた一面では、当然の事ながら発表年時の特に古い論考の中には、現在から見れば、そのままだでは、通用し難く思われるものも若干ないではない。現存業平集はすべて院政時代以後の成立とする（一八三頁）のは、片桐洋一氏の在中将集考などに鑑みれば如何かと思われ、枕草子能因本を三巻本よりよしとする（二四四頁）のも、田中重太郎氏説などの学界の通説を覆するには、さらに細かい論証を要するであらう。又、紫式部日記歌が紫式部日記の原体裁の片鱗を見せたもので、この「日記歌」の題名も、紫式部の命名か（三六一頁）とされるのも、池田亀鑑氏の研究によつて、やはり否定されざるを得ないだろう。清少納言物語所収十篇をすべて作者小式部とする（三九五頁）説も、山岸以下作者別人説を覆えずに足るとも思えないのである。また、その他、清少納言と実方との「せうといもうと」の関係を夫婦関係でないかの如く解される（二五一頁）のも岸上氏他の現在での定説に背くもので、説明がほしいのであり、帚木巻の源氏と空蟬との一夜について「逢うて逢わぬ後朝の怨めしき眠に映する」（三〇

六頁」と、旧注の如く、二人が会わなかったものの様に解されるのは、誤りであろう。鎌足が天皇の采女を得て喜んだ歌が、藤原貴族に権力が移る第一歩とされる（四三八頁）のも、御自身で断つていられるように、すこし強引だろう、川崎庸之氏らの歴史家は壬申の乱以後白鳳期に入つて、天皇絶対制が確立したと言っているのだから。しかし、これらも、あまりに簡潔な記述に由る筆者の誤読かも知れぬ。もしそうならば、それを免れるに足るだけの量の記述は、やはりお願いしたいところであつた。その他、ミズプリントがかなり目につくのも残念であり、部分的に重複部分があるのも調整して頂きたかつた。

しかし、これらは、もとより些少の瑕瑾、堂々たる本書の内容は、上代から中世に亘る古典文学研究にとつて、又一つ新たに大きな礎石が置かれたことを実感させるのであり、今日まで岡氏から測り難い学恩を蒙つた身としても、また学界の慶事としても、本書の出版を心から嬉しく有難く思うものである。（昭和四十三年六月、有精堂、A5六二〇頁、三八〇〇円）

## 藤平春男著 「新古今歌風の形成」

谷 山 茂

藤平氏は、常に文学の本質をおもうがゆえに、とうぜん文学の素材的還元や無機物的処理にはためらいがちであり、そのため新しいを超えて鋭く明快である。その藤平氏の、二十年にわたる、新古今探求の一端が、この「新古今歌風の形成」にみごとにまとめ

られているのである。

本書は、風巻景次郎、小島吉雄両先覚の方法はもちろんのこと、最近の若手の新古今研究のさまざまな成果をも含めて、それらを自由に適切に取捨するが、その中核には、まぎれもなく早稲田的批判精神が根深く生きつづけており、その伝統に立つての藤平的方法があざやかに展開されている。

藤平氏は、まずこういつている。——今日では、新古今をめぐるの文献学的研究も、「安心してよりかかれるようになってきた」ので、その結果をもふまえて、「研究者相互の自由な交流が可能になっていることであつて、新古今研究者の考え方はだんだん相似たものになつてきているとさえいえよう」と。——かりにそうであつても、藤平氏独自の識見は抜群であり、年来、私も彼の論にはほとんど全面的に賛同し敬服している。しかし、むしろ、そうだからこそ、気づいたことをすこしばかり無遠慮に述べてみたい。

第一章「基底」における、新古今歌壇の考察——建久期（良経家）歌壇、元久期（後鳥羽院）歌壇、建保期（須徳院）歌壇、貞永期（承久以後）歌壇の分析と総括とは、それぞれに十分な説得力を持ち、堂々の論考である。すなわち、後鳥羽院歌壇の歌風形式と特質とを客観的に解明すべく、その前後の歌壇の実態や性格との連続と断絶とが実にみごとに証明されているのである。

とくに、良経家（広くは九条家）歌壇での、六条藤家と御子左家の人びとの在り方の考察は、従来の諸研究のいずれよりも立体的で精緻であり、心にくいばかりの成果をあげている。定家が九